

# 令和 8 年度入学者選抜学力検査問題

## 国 語

### 注 意

- 1 監督者の「始め」の合図があるまでは、開いてはいけません。
- 2 検査時間は、9時25分から10時15分までの50分間です。
- 3 大きな問題は全部で5問で、表紙を除いて9ページです。  
また、別に解答用紙が(1)、(2)の2枚あります。
- 4 監督者の「始め」の合図があったら、すぐに受検番号をこの表紙と解答用紙(1)、(2)のきめられた欄に書きなさい。
- 5 答えは、必ず解答用紙のきめられた欄にはっきりと書きなさい。  
また、特に指示のあるもののほかは、各問いのア、イ、ウ、エのうちから最も適当なものをそれぞれ一つ選んで、その記号を書きなさい。
- 6 答えの字数が指示されている問いについては、句読点や「 」などの符号も字数に数えるものとします。
- 7 監督者の「やめ」の合図があったら、すぐやめて、筆記用具をおきなさい。

受 検 番 号

番

1

次の1、2の問いに答えなさい。

1 次の〃線の部分の読みをひらがなで書きなさい。

- (1) 来賓の臨席を賜る。
- (2) 朗らかな表情を浮かべる。
- (3) 憶測に基づく見解。
- (4) 帽子で日差しを遮る。
- (5) 鋭敏な感覚を持つ。

2 次の〃線の部分を漢字で書きなさい。

- (1) 行事を成功にミチビク。
- (2) 糸糸で手袋をアむ。
- (3) 計画のサンピを問う。
- (4) ユウビンで手紙を送る。
- (5) 紅茶にサトウを入れる。

2

次の文章を読んで、1から6までの問いに答えなさい。

美術館などのミュージアムにはかつて、わたしたちの日常からは離れた「殿堂」というイメージが伴っていたかもしれない。あるいは現在でもそのようなイメージを抱いているという人も少なからずいるだろう。ただ、日常から離れたその手の特別感は、近年では批判にさらされやすい。

哲学者のピーター・チエイニは、美術館にはさまざまなルールがあり、それが、「人びとのあいだの相互のやり取りを縮減して、<sup>(注2)</sup> 恭しい静けさを促進してしまう」と述べている。こうして生み出されるのが、どこかよそよそしい「距離のエトス」<sup>(注3)</sup>である。これに対してチエイニが推すのは、美術館に恭しく飾られている立派な芸術作

品を鑑賞することとは別の、もっとありふれたモノや活動にも価値を見いだす「日常の美学」である。ここでいう「日常の美学」は、特別なものとしての芸術作品を鑑賞するときのような、過度の完璧さを求めない。そこでは距離や排除ではなく、もっとゆるやかな、「包摂のエトス」や「帰属のエトス」が育まれるとチエイニは説くのである。このようなチエイニの議論を踏まえて言うならば、美術館のなかでの積極的な会話は、日常から断絶した場であることを理想としてきた美術館を、日常と地続きの場として、いわばつなぎ直す機能を果たすのだと考えてもよいかもしれない。

声と会話が、美術館の展示室にありふれた日常を持ち込むのだ。いずれにせよわたしたちは、相応の理由があつて作品の前で語り、相応の理由があつて作品の前で沈黙する。誰かと一緒に作品を取り囲み、意見や感想の交換をしながら作品理解を深めていくケースがある一方で、他方では、他者の声をシャットアウトして、誰からも邪魔をされずに作品そのものと対峙する<sup>(注4)</sup>というケースもある。そして、なんとも居心地が悪いことに、この二つのケースが現実の展示室のなかでしばしば対立してしまうのである。

ミュージアム、特に美術館という館種のミュージアムにおいて、「声」や「音」が争点になってしまうのはなぜか。この問いに対する最も簡単な答え方は、ミュージアムが公共の場として成立しているからこそ「声」や「音」が争点化されるのだ、というものであるだろう。

美術館を含むミュージアムの歴史は、あえて単純化して述べるならば、当初は一般に公開されていなかった個人のコレクションが、

次第に、公衆に向けて開かれていくという流れを伴っている。西洋の場合であれば、中世の王侯や教会のコレクションも、一六世紀以降に王や貴族や知識人たちが築いた収集室も、ひろく一般に向けて公開されるという性質のものではなかった。それが一八世紀以降、次第に開かれていくときに、近代的な意味でのミュージアムが誕生してくるのである。

しかしここに葛藤が生じる。コレクション、わけでも芸術作品のコレクションをみるという出来事は、私的な感性の領域に、根深く関わるものであることは疑いえない。にもかかわらず、近代以降に成立する美術館という制度は、私的な側面を多分にもつこの出来事を、公的にひらくことをよしとする。ここにあるのはしたがって、作品鑑賞を公的な舞台上に上げようとする美術館の根本にある理想が、いわば内在的に含み持っている葛藤である。

たとえば、ある美術作品を所有している個人が、それを親しい友人たちに披露しているとす。そして鑑賞の場が、所有者の書齋や応接室だったとする。この場合、所有者が作品にべたべたと手を触れようが、大声で講釈を垂れようが、これを非難することは難しい。大声での講釈にうんざりする人はいるかもしれないが、「お静かに！」などと命じてやめさせることは、現実的には無理だろう。ここで重要であるのは、作品所有者のこうしたふるまいの是非ではない。肝心であるのは、一八世紀から一九世紀にかけてミュージアムという近代的な装置が登場してくる以前には、このような私的な鑑賞の方がむしろ普通だったという点である。<sup>(2)</sup> 絵の前は、必ずしも、公共的な空間なのではない。もしくは、絵の前で成立する公共

性は、いつの時代においても常に、わたしたちが現代的な意味で思い浮かべる公共性と同じだったわけではない、と言ってもよいかもしれない。

、近代以降の美術館という制度のもとでは、どうだろうか。美術館等のミュージアムは、コレクションを、私的な所有物としてではなく、共有の財として分けもつことを前提とする近代的なシステムである。鑑賞を、私的な感性の領域での出来事から、あるいは仲間内の交流の場で完結する出来事から、公共の場で生じる出来事へと拡張しようとするのが、美術館である。つまるところ美術館は、無数の鑑賞者が抱えている無数の私的欲求を、ほどよく叶え、ほどよく抑えて、公共的な空間をつくり出すという課題を宿命的に負っている。

作品の前での会話が、わけでも美術館の展示室で問題となるのは、まさしくこうした文脈においてである。美術館には、多様な来館者が多様な欲求を抱いてやって来る。語りたいたい人もいれば、語りたくない人もいる。あるいは、語りたいたいときもあれば、語りたくないときもある。これらの私的な欲求を適宜汲み取り、適宜切り捨て、<sup>(3)</sup> 妥当な落としどころを探すことが不可欠である。

(今村信隆『お静かに！』の文化史——ミュージアムの声と沈黙をめぐって「から」)

(注1) ミュージアム＝博物館や美術館のこと。

(注2) 恭しい＝丁寧なこと。

(注3) エトス＝ある集団に共有される道徳的な社会意識。

(注4) 対峙する＝直面する。

1 [ ] に入る語として最も適当なものはどれか。

ア だから      イ なぜなら      ウ では      エ つまり

2 ピーター・チエイニの意見と筆者の解釈について、ある生徒が

次のようにまとめた。 [ X ]、 [ Y ]、 [ Z ] に入

る言葉の組み合わせはどれか。

○ピーター・チエイニの意見

・ありふれたモノや活動にも価値を見いだす。

Ⅱ「日常の美学」

← 「包摂のエトス」や「帰属のエトス」を育む。

○筆者の解釈

美術館は、さまざまな [ X ] があるために、日常と [ Y ] であるが、声と会話により、日常と [ Z ] になりうる。

ア	X	イメージ	Y	断絶した場	Z	地続きの場
イ	X	イメージ	Y	地続きの場	Z	断絶した場
ウ	X	ルール	Y	断絶した場	Z	地続きの場
エ	X	ルール	Y	地続きの場	Z	断絶した場

3 美術館の根本にある理想が、いわば内在的に含み持つている葛藤とあるが、このような葛藤が生じるのはなぜか。六十字以内

で書きなさい。

4 絵の前は、必ずしも、公共的な空間なのではないとあるが、<sup>(2)</sup> どういうことか。四十五字以内で書きなさい。

5 妥当な落としどころとあるが、筆者の考える「妥当な落としどころ」として最も適当なものはどれか。<sup>(3)</sup>

ア 多くの鑑賞者の欲求が鑑賞の場から隔絶されている状態。

イ 多くの鑑賞者の無数の欲求が完全に満たされている状態。

ウ 多くの鑑賞者の欲求が公共性よりも重視されている状態。

エ 多くの鑑賞者の様々な欲求が適度に実現されている状態。

6 本文における筆者の考えとして最も適当なものはどれか。

ア ミュージアムの特別感をつつては「殿堂」と表現したが、今日

ではそのイメージは失われている。

イ 近代以降の美術館は、王侯貴族や知識人たちの収集物を共有

の財と見なすことを前提としている。

ウ ミュージアムという近代的な装置には、芸術を価値付ける基

準の多様化による争いがつきまとう。

エ 作品への理解を深めるには、沈黙して作品と向き合うことよ

りも他者との語り合いが必要である。

次の文章を読んで、1から5までの問いに答えなさい。

「私(ワカ)」は、京都の有名和菓子店「洛中甘匠庵」らくちゅうかんしやうあんで和菓子職人の見習いとして働きはじめた。その後、高齢の「大将」の後継者となり、初めて全工程を一人で手がけたのが「雲珠桜」という菓子であった。

体調を崩した大将に代わって「神田さん」と店を切り盛りする「私」は、大将の妻である「おかみさん」から三人一組で出場する和菓子品評会の出場案内を受け取った。

大将と私のフォローを神田さんにもしてもらおう。それが一番いい布陣か。いくら気を揉んだところで、まずは一次選考を通過しなければお話にならない。だが一次選考に、未熟な私が最も自信のある菓子を出すわけにもいかない。定時で女性たちが帰ると、私は神田さんと明日の準備に取りかかる。しばらくすると店の前で車の停まる音がした。(注1)健太郎さんが、おかみさんと帰ってきたのだ。二人が作業場に姿を見せると、私と神田さんは「お疲れさまです。」と頭を下げる。

「ワカ、あの案内の紙やけど、見てくれはりましたか。」

「ええ、拝見しました。」

「どう思われます。」

(1)「どう思われます。」

「けど、って？」

「もし入賞できなかったら、洛中甘匠庵の看板を汚すことになりませんか。そもそも一次選考を通過する自信さえ、正直……。」

「汚すって、なんですか？」

「大将とおかみさんが長年築いてきはった名誉とか信頼とか、なんかそういうものを。」

おかみさんと私のあいだの長い沈黙が、冷やされ固められ、沈んでいくのを感じた。

「……そう思うんやったら、やめときよし。(注2)それこそ大将にも私にも失礼やさかい。ワカの腕が未熟なことくらい、私、よう知ってます。挑戦しいひんかったら名が汚れることもあらしません。(注3)せやけど、へっぴり腰で挑戦もしいひん後継者を選んでしもうたとあつては、大将と私のプライドが汚れます。」

おかみさんの眉が吊り上がるのを初めて見た。私は全身が氷のようになつてしまつて言葉が出せない。作業場に気まずい空気が張りつめる。だが誰もそれを修復できず、おかみさんはくると背を向けると足早に出ていった。

「おかみさんは賞をとつて欲しいなんて、思つてはらへんのですよ。」

神田さんは言う、私の左肩にそつと手のひらを置いた。

「出場する以上、賞を狙うのは普通じゃないですか。」

神田さんの手を払う。

「ワカのお気持ちもわかります。でも看板を汚すやなんて、そんなこと言うたらあきませんよ。私たちのワカは、もうこの店のリー

ダーなんです。このメンバーで力を合わせて暴れて欲しい。ただそれだけなんやと思いますよ、おかみさんは。」

(2) そう言った神田さんの言葉に、なにも返せない。私は神田さんと健太郎さんに「明日は、ゆつくり休んで下さい。」とだけ言って、作業場をあとにした。

帰りの地下鉄烏丸線の車内。紙粘土を左手に握る。餛玉を切つて包餛する。それを何度も繰り返す。母親にも、あそこまでの勢いで突き放されたことはなかったかもしれない。包餛した紙粘土を、小指の背で梅の形にする。次に中指の第二関節を尖らせ、中央に小さなくぼみを入れて完成させた。

「おにいちゃん、おままごと?」

我に返った。いつのまにか隣に座っていた幼い女の子が、

言葉で話しかけてきた。

「うん、そうやで。お兄ちゃんなあ、おままごとしてんねん。」

「もういつかい、やってやってえ。」

「いいよ。」

私はリュックサックから三角ペラを取り出し、今度は桜花を作ってみせた。

「マーマー、みてみてえ。さくらのおはな。」

「もうやめときなさいっ。すみません、ご迷惑をおかけしまして。」

「いいんですよ。じゃあ、もうひとつだけやってみよか。」

次は紅葉の形にした。

「凄っ!」

飛び出しそんな目をして驚いたのは、母親のほうだった。私は丸めていた背筋を伸ばす。吊革を握る学生風のカップルと四人の外国人が、柔らかな視線を私の手もとに落としていた。

——私には見えていないだけで、待っていてくれる人が、いるのかもしれない。

休みが明けると私は作業場に、おかみさん、神田さん、久美子、

新田さん、それに健太郎さんと呼んだ。

(3) 「一次選考は、雲珠桜で挑みます。」

大将が認めてくれた菓子。大将が名づけてくれた菓子。これで落ちたとしても悔いはない。だが、落ちたくはない。落ちるわけがない。絶対に。

(高田充「今日も私は、ひとつの菓子を」から)

(注1) 健太郎さん || 洛中甘匠庵で働く店員。後出の久美子、新田さん

も同じ。

(注2) やめときよし || やめておきなさい。

(注3) あらしません || ありません。

1 [ ] に入る語として最も適当なものはどれか。

ア たどたどしい      イ すがすがしい

ウ かいがいしい      エ とげとげしい

2 どうって、出場してみたいですけど とあるが、どのような「私」の心情が読み取れるか。この場面の「おかみさん」と「私」のやりとり全体を踏まえて六十字以内で書きなさい。

3 そう言った神田さんの言葉に、なにも返せない とあるが、なぜか。

ア 素直には受け入れがたいものの、おかみさんと神田さんの思いは理解できたから。

イ 神田さんから向けられる同情が軽薄なものに感じられ、激しい怒りを覚えたから。

ウ おかみさんの思いを神田さんが代弁してくれたため、感謝の思いが深まったから。

エ おかみさんの厳しい態度に動揺し、誰の言葉にも耳を貸す気になれなかったから。

4 ③ 一次選考は、雲珠桜で挑みます について生徒たちが話し合っている。次の会話文中の  に入る内容を三十字以内で書きなさい。

生徒A 「私」はどうして品評会に出場しようと思ったのかな。
生徒B 「電車」の中の出来事で、心情に変化があったようだな。

生徒C 「そうだね。自分の作る菓子を楽しみに待っていてくれる人がいるかもしれないと思うようになったんだね。」

生徒A 「なるほど。じゃあ『雲珠桜』で挑戦しようと思ったのはどうしてなのかな。」

生徒B 「それは、自分で初めて作った菓子だからでもあるし、 と思ったからでもあるのではないかな。」

生徒C 「そうか。『雲珠桜』という和菓子の名前には『私』にとって大事な意味があるんだね。」

5 この文章の表現上の特徴を説明したものとして最も適当なものはどれか。

ア 語り手の視点が過去と現在を行き来し、登場人物の未来を決定付ける出来事の全容が次第に明らかになっている。

イ 姿を現さなくとも大将の存在が登場人物の緊張感を高め、伝統を守り続ける店の重厚な雰囲気かきを醸し出している。

ウ 主人公が創作する和菓子の繊細な美しさを丁寧に描写することで、場面全体に鮮やかな色彩がもたらされている。

エ 物語を主人公の視点から描くことで、主人公の置かれた状況や言い表せない心情が臨場感豊かに表現されている。



5 やさしうも仕りけるものかな とあるが、天皇はどのようなことを風流だと考えているのか。

ア 悪天候の翌朝に庭の手入れをすること。

イ 天皇のために熱い酒の用意をすること。

ウ 漢詩の内容のとおりに行動をすること。

エ 天皇の訪問前に紅葉の下見をすること。

6 本文の内容と合うものはどれか。

ア 天皇は殿守のとものみやぶこの行動を戒めることで、規則を守ることの大切さに気付かせた。

イ 天皇は自身の知識と照らし合わせることで、殿守のとものみやぶこの行動を肯定的に捉えた。

ウ 天皇は自分の強い信念を貫き通すことで、殿守のとものみやぶこからのさらなる信頼を得た。

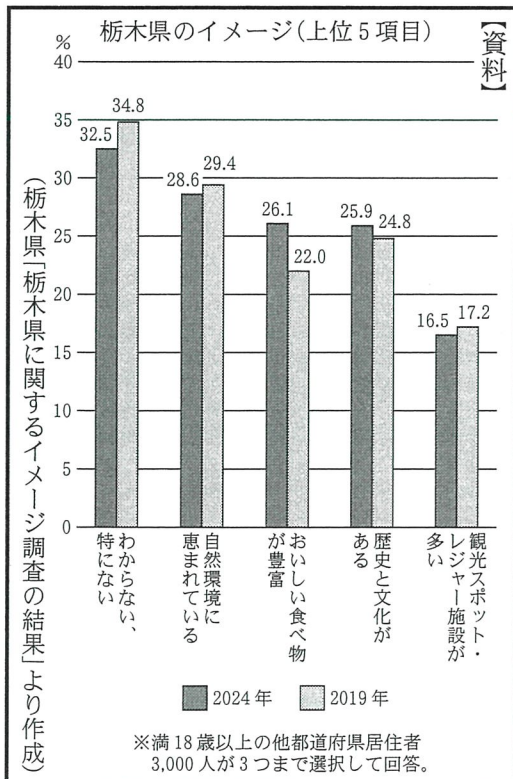
エ 天皇は報告する重要性を蔵人に説明することで、ありのままに打ち明ける利点を理解させた。

5 次の1、2の問いに答えなさい。

1 次の会話文は、「地域の魅力を伝えよう」というテーマで調べ学習を行っているグループの会話の一部である。これを読んで、(1)から(5)までの問いに答えなさい。

生徒A 「栃木県のホームページでこんな【資料】を見つけたよ。栃木県外に居住している人から見た栃木県に関するイメージ調査の結果だつて。」

生徒B 「おもしろい資料だね。他の都道府県の人から見た栃木県への意見は参考になりそう。」



生徒A 「県外の人にも栃木県の良いイメージを知ってもらえているのはうれしいね。」

生徒C 「でも、一番多い回答が、『わからない、特にない』という結果は残念だな。もっと栃木県の良さをPRする必要があるんじゃないかな。」

生徒A 「それなら、栃木県の良さを全国にPRするにはどうしたらいいか、地域の人たちにインタビューしてみたらどうかかな。栃木県の魅力を効果的に伝えるための方法を聞いて、一緒に考えてみようよ。」

生徒B 「いいアイデアだね。でも、インタビューの時間は限られていてから、質問の内容や聞き方をしっかり考えないといけないよ。」

生徒C 「そうだよね。インタビューの目的や意図はわかりやすく伝えよう。他に注意することはあるかな。」

生徒B 「自由な視点から回答できるような聞き方をして、多様な意見が出るようにしてみたらどうかね。」

生徒A 「『』というような聞き方をすれば、色々な答えが出そうだね。」

生徒C 「そうだね。このやり方で進めてみよう。」

(1) ① おもしろい と品詞が同じものはどれか。

ア 明るい    イ きれいだ    ウ 読む    エ 大きな

(2) ② 聞いて を敬語表現に改めたものとして最も適当なものどれか。

ア いただいて    イ おっしゃって  
ウ お召しになって    エ 伺って

(3) ③ 注意 と熟語の構成が同じものはどれか。

ア 寒冷    イ 洗車    ウ 長文    エ 濃淡

(4) 会話文中の  に入る内容として最も適当なものどれか。

ア あなたの暮らす地域が全国に誇れる自然環境は何ですか。  
イ 調査結果の項目であなたの考えに近いものはどれですか。  
ウ 二〇一九年と二〇二四年の調査結果に違いはありますか。  
エ 栃木県の魅力のPRに有効なのはどのような活動ですか。

(5) ④ このやり方で進めてみよう とあるが、会話の内容を踏まえると、どのようなインタビューを行ったと考えられるか。

ア テンポよく質問をして、相手の考えをすぐ評価した。  
イ 個人の意見を尊重するために、一人ずつ話を聞いた。  
ウ 相手に調査目的や意図を伝え、幅広い回答を求めた。  
エ 相手の答えに耳を傾けて、意図や背景を掘り下げた。

2 図書委員会では、読書活動を推進するために、おすすめの本の紹介を計画している。あなたは、「A 様々な分野・テーマの本を紹介すること」と「B 特定の分野・テーマの本を紹介すること」のどちらの方法を選ぶか。あなたの考えを国語解答用紙(2)に二百字以上二百四十字以内で書きなさい。  
なお、次の《条件》に従って書くこと。

- 《条件》
- (i) AとBのどちらかの方法を選ぶこと。
  - (ii) 選んだ理由を明確にすること。

(問題は以上です。)

(令8)

国語採点基準

(総点100点)

〔注意〕

- 1 この配点は、標準的な配点を示したものである。
- 2 定められた欄に答えが書かれていないときは、点を与えない。
- 3 指示された答えと違う表現で記入されていても、正答と認められるものには、点を与える。
- 4 定められた数より多く答えたときは、点を与えない。
- 5 採点上の細部については、各学校の判断によるものとする。

〔5〕

2 (作文の評価の観点)

- 1 形式 目的に応じた適切な叙述であるか。字数が条件に合っているか。
- 2 内容 立場や理由を明確にして、自分の意見をわかりやすく筋道立てて述べているか。
- 3 表現・表記 文体に統一性や妥当性があるか。主述関係や係り受けなどが適切であるか。

※ これらの項目に照らし、各学校の実態に即して総合的に評価するものとする。

得点

12

1			
2		1	
(4)	(1)	(4)	(1)
郵 便	ユウ ウ 導 ミチビ く く	遮 る る	さへぎ る る 臨 席 りん せき
(5)	(2)	(5)	(2)
砂 糖	サ トウ 編 ア む む	鋭 敏 えい びん	朗 らか ほが らか
2点×5	(3)	2点×5	(3)
	賛 否	サン ピ	憶 測 おく そく

得点

20

2					
6	5	4		3	
イ	エ	(例)		(例)	
		る と は 限 ら な い と い う こ と 。	の 前 は 誰 も が 鑑 賞 で き る 空 間 で あ	と 鑑 賞 を 、 公 的 に 開 く こ と を 目 指 す	近 代 以 降 の 美 術 館 は 、 本 来 、 私 的
3点	2点	4点		6点	

得点

22

5	
1	
(4)	(1)
エ	ア
(5)	(2)
ウ	エ
	(3)
	イ

2点×5

得点

10
----

4					
6	5	4	3	2	1
イ	ウ	ア	(例) 紅 葉 が す べ て な く な っ て い た 。	イ	か よ う
3点	2点	2点		2点	2点

3点

得点

14
----

3				
5	4	3	2	1
エ	(例) な 大 ら 将 ば が 、 認 自 め 信 て を 名 持 付 っ け て て 挑 く 戦 れ で た き 菓 る 子	ア	(例) ず 頼 な 品 、 を さ 評 傷 言 が 会 付 い 入 で く 訳 り 入 こ に 混 賞 と 出 じ し を 場 り た 恐 の 、 い れ 覚 店 思 る 悟 の い 心 が 名 と 情 決 誉 自 。 ま や 信 ら 信 の	ア
4点		4点		3点

4点

7点

得点

22
----